

# 平成26年度八重山群島病害虫発生予報第7号(10月予報)

## I 10月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	70	40	20
平年並	20	40	40
低い(少ない)	10	20	40

(平成26年9月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	25.9	28.7	23.7	204.5	158.4

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

## II 10月の発生予報および防除上の注意事項

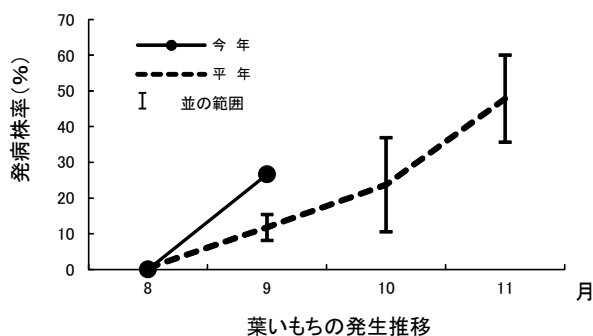
### 1 水稲(二期作)

#### (1) いもち病(葉いもち)

発生程度 : 多

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、発病株率は26.6%(前年3.8%、平年11.8%)と平年より高く、一部地域では特に高かった。



<防除上注意すべき事項>

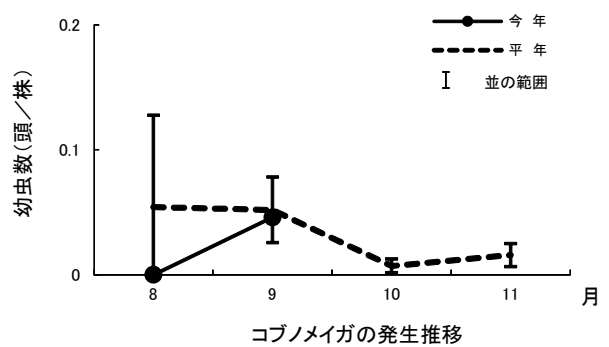
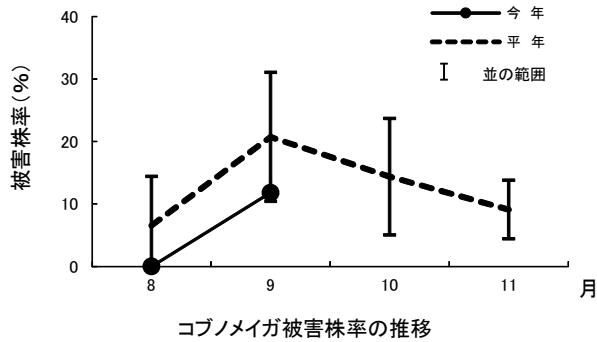
- 上位葉に病斑が目立つ場合は、穂いもちに進展する可能性がある。穂いもちは発生後の防除が困難であるため、葉いもちの発生状況を確認し多い場合は予防防除を行う。
- 粒剤は出穂前に散布するが、薬剤の種類によっては使用時期が異なるので、確認して使用する。
- 粉剤や水和剤は、穂ばらみ期～穂揃い期に散布する。

(2) コブノメイガ

発生程度：並

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、被害株率は11.8%（前年13.9%、平年20.7%）と平年並で、株当たり幼虫数は0.1頭未満（前年0.1頭未満、平年0.1頭未満）と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 老齢幼虫には薬剤の防除効果が極端に低くなるので、薬剤防除適期は粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期から約1週間後である。
- b 窒素肥料の過用は避ける。

○ 斑点米カメムシの防除対策

- a 9月下旬の調査の結果、出穂後の水田に斑点米カメムシ類の発生が確認された。
- b 畔や水田周辺の雑草地から出穂後に水田内に移動するため、定期的な除草などにより密度を抑える。
- c 出穂期前後の除草はカメムシ類が水田に移動するので極力控える。
- d 薬剤防除は、基本として穂揃期とその7～10日後の2回実施する。

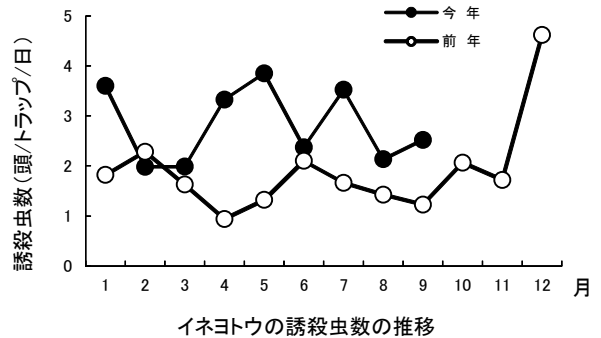
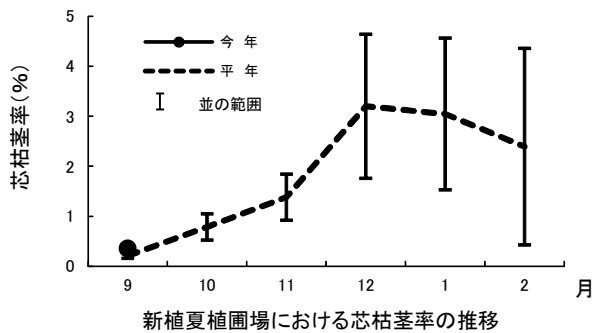
2 さとうきび

(1) イネヨトウ

発生程度：多

予報の根拠

- a 9月中旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は0.4%（前年0.4%、平年0.2%）と平年より高かった。
- b 9月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は2.5頭（前年0.8頭）であった。



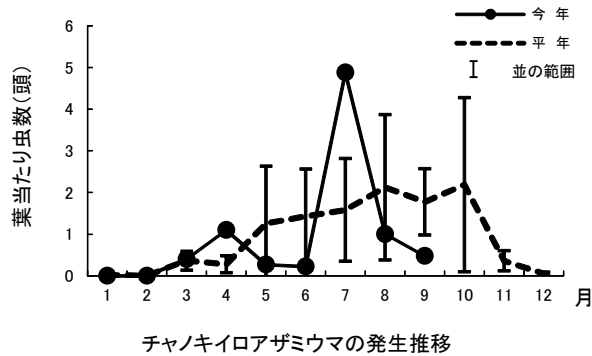
<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉梢部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 植付け時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

### 3 マンゴー

#### ○ チャノキイロアザミウマの防除対策

9月中旬の調査の結果、葉当たり成幼虫数は0.5頭(前年4.3頭、平年2.1頭)と平年よりやや少なかった。



#### <防除上注意すべき事項>

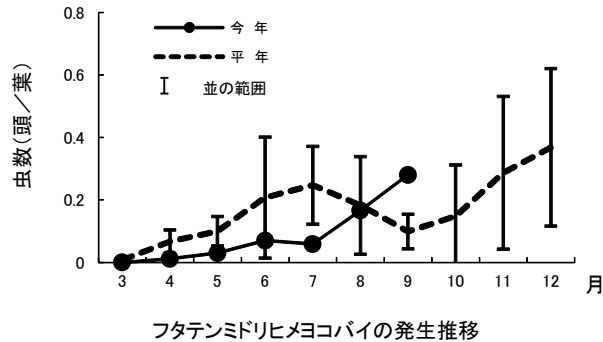
- 収穫期に発生の多かった施設では薬剤による防除に努める。
- 剪定後の新梢の発生が早い施設では、本種の発生時期が早くなることから、新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

### 4 オクラ

#### (1) フタテンミドリヒメヨコバイ

発生程度 : 多  
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.3頭(前年0.1頭、平年0.1頭)と平年より多かった。



#### <防除上注意すべき事項>

- 多発すると吸汁加害により葉の萎縮や黄化が進み生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 発生源となる圃場周辺の雑草を除去する。

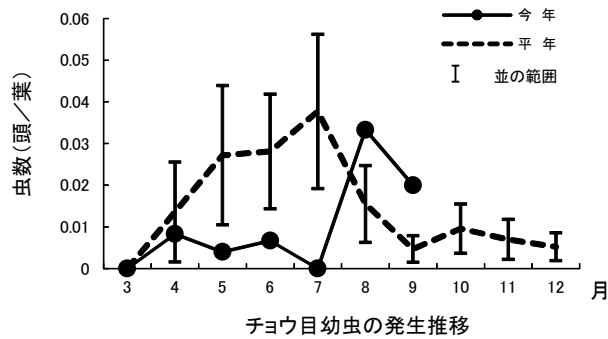
(2) チョウ目幼虫

発生程度 : 多

予報の根拠

a 9月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.02頭(前年0.01頭以下、平年0.01頭以下)と平年より多かった。

b 圃場で見られたチョウ目幼虫のうち、ほとんどがワタノメイガであった。



<防除上注意すべき事項>

a 発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。

b 巻き葉内の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。